

研究フォーラム+映画上映会

コロニアル 沖縄

記録映像からみた植民地思想の系譜

「海の民 沖縄物語」(昭和17年/27分)東亜発聲映画社

日時：2008年 3月23日(日) 10:00～

場所：沖縄県立博物館・美術館 講堂

【3月23日】

10:00 - 12:10

Film-Session1 会場：沖縄県立博物館・美術館講堂

「沖縄を捉えた記録者たち—南島をみる眼差し」

間宮則夫 「それは島～集団自決の一つの考察～」(1971年/40分)
北村皆雄 「アカマタの歌～海南小記序説～」(1973年/40分)
比嘉豊光 「島クトゥパで語る戦世」(2003年/40分)

13:15 - 14:35

Film-Session2 会場：沖縄県立博物館・美術館講堂

「南洋特集」 進行：北村皆雄

「海の民 沖縄物語」(昭和17年/27分)東亜発聲映画社
「海の生命線」(昭和8年/50分)横浜シネマ照会

14:45 - 16:45

Discussion 会場：沖縄県立博物館・美術館講堂

「記録映画とポストコロニアル思想」 担当：須藤義人

仲里 効 (表象研究・沖縄出身)
比嘉 豊光 (写真家・沖縄出身)
間宮則夫 (映像作家・本土出身)
北村皆雄 (映像作家・本土出身)
後多田 敦 (批評家・元沖縄タイムス記者)
崔吉城 (植民地研究・韓国出身)

※参加予約は必要ありません。直接会場にお越しください。
入場料は無料ですが、資料代として500円をいただきます。



海の民 沖縄島物語

1942/モノクロ/35mm/27分

監督：村田達二 製作：東亜発聲映画

大東亜共栄圏の正当性を説き、国家総動員体制づくりのために国民を煽動したプロパガンダ映画である。海外雄飛、逞しい肉体と健全なる精神、勤労と禁欲、血縁共同体など、戦時体制における理想的な精神論を展開している。



海の生命線

1933/モノクロ/35mm/50分

解説 青地忠三 製作：横浜シネマ商会

大東亜共栄圏の正当性を説き、国家総動員体制づくりのために国民を煽動したプロパガンダ映画である。当時の日本が統治した南洋群島(マーシャル、カロリン、マリアナ諸島)の歴史や民俗を紹介している。

【フィルムセッション趣旨】

沖縄を捉えた記録者たちが、どのような眼差しで映像作品を残しているのかを再検討することを目的としている。戦前から現在に至るまで、本土の撮影者は「沖縄」を南島と位置づけ、エキゾチシズムに毒された眼差しから、映像を制作し続けてきた。とりわけ、沖縄や南洋の民俗や歴史を取りあつかった、いわゆる「文化映画」を辿ると、植民地思想の系譜が明確に見えてくる。「ポストコロニアルズム」という思想的枠組みが打ち出されて以来、映像を含む文化研究は政治性を帯び、植民地主義からの脱却ならぬ、解放運動的な思想運動として昇華した。無論、沖縄をテーマとした映像研究にも、「撮影される側＝搾取される側」(沖縄)、「撮影する側＝支配する側」(日本本土)という二項対立の構図が原則的なパラダイムとなっている。それゆえに、撮られ続けている「コロニアル沖縄」において、沖縄を撮影した専門家たちが、記録映画のゆくえを激論し合うことは、避けて通るべき道ではない。建設的な第三の道が、弁証法的に見つかることを期待したい。